日本人プロサッカー選手の海外リーグ定着の要因 ードイツ・ブンデスリーガに在籍した選手の事例からー[†]

長 澤 和 輝* 畔 蒜 洋 平* 児 玉 ゆう子**
平 田 竹 男*

Factors of Japanese Football Players who Played in the Bundesliga for Multiple Years[†]

Kazuki NAGASAWA*, Yohei ABIRU*, Yuko KODAMA**
and Takeo HIRATA*

Abstract

The purpose of this study was to investigate the reasons why Japanese football players can play in the Bundesliga for multiple years. In this survey, we had interviews with five Japanese football players who played in the Bundesliga for over five seasons. The contents of the interviews were analyzed by SCAT (Steps for Coding and Theorization) method and extracted the same factors. As a result, it was found that they focused on building a relationship of trust with their coaches. They had the flexibility to change their playing style and position to match the coach's desired football style. In order to continue to be selected as a member of a match in the Bundesliga, not only high level football skills but also ability to adapt to the intentions of the coach are required. From the above results, it was suggested that in order to continue playing in overseas leagues, aspects other than soccer skills, such as tactics and understanding of the coach's ideas, are also important.

Key words : Football, International Transfer, Bundesliga

1. 序 論

近年,多くの日本人選手が海外リーグへ挑戦し出場機会を得ているが,欧州5大リーグと呼ばれるイングランド・プレミアリーグ(以下,プレミアリーグ),スペイン・リーガ・エスパニョーラ,ドイツ・ブンデスリーガ(以下,ブンデスリーガ),イタリア・セリエA(以下,セリエA),フランス・リーグ・アンで複数年

にわたり在籍し活躍している選手は限られる。

欧州5大リーグの中でもブンデスリーガでは,1977年に奥寺康彦氏が日本人として初めてFCケルンに移籍しリーグ優勝とドイツカップ優勝に貢献したことから始まり,2009年に長谷部誠選手(以下,長谷部選手)がVfLヴォルフスブルクに在籍しリーグ優勝に貢献,また香川真司選手(以下,香川選手)がボルシア・ドルトムントに在籍し2010年上半期MVP,主力メ

[†] 原稿受付 2020年9月15日 原稿受諾 2021年5月28日

* 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科 〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

** 星槎大学大学院教育学研究科 〒231-0021 神奈川県横浜市中区日本大通り11

* Graduate School of Sport Sciences, Waseda University, 1-6-1, Nishiwaseda, Shinjuku-ku, Tokyo, Japan (169-8050)

** Graduate School of Education, Seisa University, 11, Nihon-Odori, Naka-ku, Yokohama, Kanagawa, Japan (231-0021)

ンバーとしてリーグ優勝に貢献したというように、2000年から2019年までに41名の日本人選手がブンデスリーガ1部、2部のクラブに在籍し日本人選手が一定の成果、実績を挙げている。

第一著者（以下、筆者）は2013-2014年シーズンから2015-2016年シーズンの3シーズン、ブンデスリーガの1.FCケルン（以下、FCケルン）でプレーをした。筆者がFCケルンと契約するに至ったきっかけは、大学4年次の2013年にユニバーシアード日本代表の一員としてドイツ遠征を行った際にFCケルンのスカウトから評価を得たことで、同年12月初旬に練習生として同クラブの練習に参加したことである。その際にクラブからプロ契約の打診があり、大学卒業後の進路としてJリーグクラブではなくブンデスリーガのクラブを選ぶことを決意し、2013年12月22日に正式にプロサッカー選手として契約に至った。Jリーグクラブからブンデスリーガのクラブへの移籍であれば、クラブや選手の繋がりに事前に移籍先である海外クラブの情報を入手するのが一般的である。しかし、筆者が在籍していた専修大学とFCケルンには関係性もなく、現地クラブに在籍していた日本人選手との繋がりもなかったため、FCケルンへ加入するにあたり、どのような準備をし、何に気をつけるべきかなどの事前情報がなく、全てが手探りであった。実際にFCケルン加入後、チームの練習に参加して初めてチームのサッカースタイルを知り、更にドイツ語が話せない状況でチームメイトとのコミュニケーションをとらなくてはならず、チームに順応するまでに多くの苦労をした。また、チーム加入時は住居が決まっておらず、ケルン体育大学の学生寮に仮住まいの状態で練習に参加しながら住居を探すなど、徐々に生活環境を整えていく状況でもあった。このような苦労は筆者に限るものと思われたが、Jリーグクラブからブンデスリーガに移籍した日本人選手に話を聞くと筆者と同様の苦労を経験していることが分かった。

ブンデスリーガに移籍した41名の選手のうち5シーズン以上在籍した選手は11名であり、ブ

表1 日本人サッカー選手のドイツ・ブンデスリーガ在籍年数（2000年～2019年）

在籍年数	人数	割合
1年	14	34%
2年	7	17%
3年	7	17%
4年	2	5%
5年	4	10%
6年	3	7%
7年	1	2%
8年	1	2%
9年	1	2%
10年以上	1	2%
合計	41	

<https://www.transfermarkt.com/>より筆者作成¹⁾

ンデスリーガに定着できなかった選手の中には日本代表クラスの実力がある選手もいた〔表1〕。著者の経験からもブンデスリーガに定着する要因としてサッカーの技術以外の要因があるのではないかと考え、ブンデスリーガで活躍した選手の経験を聞き取り、その内容を分析して体系的にまとめることは、海外リーグでの活躍を目指す日本人選手や指導者の参考になると考え、研究に着手した。

日本人選手の国際移籍に関しては、高橋（2004）が²⁾、公開情報から日本人選手の国際移籍の歴史的経緯の調査、及びJリーグ開幕以降の日本人Jリーグ選手の移籍先を時系列にまとめ、日本人選手の国際移籍の要因を心理的要因、技術・適応能力的な要因、社会・制度的な要因に分類した分析を行っている。また上向ら（2016）が³⁾、匿名という形で欧州主要リーグのクラブに在籍する現役サッカー選手4名に対して、海外で経験した課題や対象方法、望まれるサポートについて調査を行っている。しかし、実名も含めた日本人選手の聞き取りから得られた情報や、海外リーグで定着するための要因については、十分に検討されていない状況である。

そこで、本研究は、日本人選手がブンデスリーガで定着することができた要因を明らかにする

表2 インタビュー対象者のブンデスリーガ在籍年数と所属クラブ

選手名	ブンデスリーガ 在籍年数	所属チーム
香川真司	9	2010-2012: ボルシア・ドルトムント 2014-2019: ボルシア・ドルトムント
内田篤人	7	2010-2017: シャルケ04 2017: ユニオン・ベルリン
細貝 萌	6	2011-2013: レパーカーゼン (Loan 2011-2012: FCアウグスブルク) 2013-2016: ヘルタ・ベルリン (Loan 2015-2016: トルコ・ブルサスボル) 2016-2017: シュトゥットガルト
大迫勇也	6	2014: TSV1860 ミュンヘン 2014-2018: 1.FCケルン 2018-2019: ヴェルダー・ブレーメン
原口元気 (※)	5	2014-2018: ヘルタ・ベルリン (Loan 2018: フォルトゥナ・デュッセルドルフ) 2018-2019: ハノーファー96

※所属チームの在籍年は2014年になっているが2013-2014シーズン終了後にチームに加入した為、ブンデスリーガ在籍年数を5年とした。

ことを目的とする。

2. 方法

2.1 言葉の定義

本研究では「2000年～2019年の間にドイツ・ブンデスリーガの1部または2部に5シーズン以上在籍」をブンデスリーガの定着の定義とした。ブンデスリーガのひとつのクラブに5シーズン以上在籍することと、複数クラブに在籍することの差異は本研究では考慮しないものとした。また、ブンデスリーガの在籍が5シーズン未満で、他の海外リーグへ移籍した場合は定着の対象から除外した。

2.2 インタビュー調査および分析手法

本研究の対象である5シーズン以上ブンデスリーガに在籍した選手のうち、香川選手、内田篤人選手（以下、内田選手）、細貝萌選手（以下、細貝選手）、大迫勇也選手（以下、大迫選手）、原口元気選手（以下、原口選手）の5名から、協力が330得られた〔表2〕。

上記5名に対して半構造化インタビューを行い、インタビュー時間は60分程度で、「国際移籍の経緯」、「国際移籍後に苦労したことや工夫

したこと」、「今後日本人サッカー選手がブンデスリーガに定着する上で必要なこと」などが主な質問であった。

インタビュー調査の内容分析方法は、大谷(2007)⁴⁾が考案した質的分析方法「SCAT (Step for Coding and Theorization)」の概念化の手順を参考に、インタビュー内容の逐語録（テキスト）を作成し、(1)テキスト中の注目すべき語句、(2)テキスト中の語句の言い換え、(3)(2)を説明するようなテキスト外の内容、(4)テーマ・構成概念の順に分析を実施し、概念として抽出された言葉を用いて各選手のストーリーラインと理論的記述を作成した。表3は内田選手の分析過程であるが、残りの4名についても同様の方法を用いてSCAT分析をまず行った。

次に、SCAT分析の結果得られたストーリーラインから導き出された5名各々の理論的記述をコード化、コードの類似性を検討しサブカテゴリーに集約、さらに抽象度を上げた類似性を検討しカテゴリーに集約した。SCAT分析を採用した理由は、大谷(2007)⁴⁾が当該手法の有用性として「比較的小さな質的データの分析に対して有効である」ことを指摘しており、本調査において5名のインタビュー結果という小

表3 内田選手のSCAT分析

発話者	テキスト	〈1〉テキスト中の注目すべき語句	〈2〉テキスト中の語句の言い換え	〈3〉左を説明するようなテキスト外概念	〈4〉テーマ・構成概念
内田篤人	マगत（監督）がめちゃくちゃ厳しい。軍隊のよう。一生懸命にやってスタメンから外れることもベンチ外になることもあるが、とりあえず腐らずにすることが重要だと（マगत監督から指導を受けた経験がある）長谷部さんからも言われた。ある程度監督の好きなプレースタイルに合わせていった。守備をしっかりとしなさいといけな、攻撃をしっかりとしなさいといけなとか、監督が怒るところをよく観察していた。マगतはとりあえず走って闘う。絶対に文句を言わない、腐らない。	マगत（監督）がめちゃくちゃ厳しい。一生懸命にやってスタメンから外れることもベンチ外になることもある…とりあえず腐らずにすることが重要だと長谷部さんからも言われた。ある程度監督の好きなプレースタイルに合わせていった。監督が怒るところをよく観察、マगतはとりあえず走って闘う	厳しい監督の下でプレー、監督の試合出場の基準が不明確。長谷部選手からアドバイス、監督の求めるプレースタイルに合わせた。監督が怒るところを観察することで考えを把握。監督は走って闘うプレーを好む	監督の指導は厳しく分らない部分もあった。長谷部選手のアドバイスもあり不信任を抱かずにプレーを続けた。監督の行動を観察し監督の求めるプレーを行った	監督の言動や行動から、監督が求めているプレースタイルを理解し、実行することで信頼を得ることに努めた。
内田篤人	ランゲは守備の切り替えをもっと速くしないといけななど、現代サッカーはいなど、ランゲニックは切り替え早くゲイゲンプレス、ディマッテオはスリーバックにして守備的。つまらんってファンからは言われていた。キーラーは、戦術はあんまりなかった。戦術というよりは選手を配置することで解決していたように思う。それって、その選手としてハマってしまえば、スタメンから外れることはない。	ランゲニックは切り替え早くゲイゲンプレス、ディマッテオはスリーバックにして守備的、キーラーは戦術はあんまりなかった。選手としてハマってしまえばスタメンから外れることはない	ランゲニック監督は切り替えが早いサッカー、ディマッテオ監督は3バックの守備的なサッカー、キーラー監督は戦術はあまりない、監督の方針と選手のプレースタイルが合えばスタメンから外れることはない	監督によって戦術が変わる、各監督の考えを実行できるプレーができればスタメンから外れない	監督それぞれの戦術や好みに合わせてプレーをすることで試合に出場することができた
内田篤人	チームのために犠牲になることができる。目立たなくてキャラが薄いって印象になってしまう可能性もあるけれど、私の場合ポジションとして王様ではないポジションで自分を犠牲にしてのプレーがあっていたように思う。ドイツではそのようなタイプをちゃんと認めてくれる。シンジのように1年目からダービーのように活躍した場合は別だけれど、コッコとするポジションだからね、長く出続けて認められるからね。頑張って頑張ってようやく、右内田で行こうってなる。	チームのために犠牲になることができる。目立たなくてキャラが薄いって印象になってしまう可能性もある。ドイツではそのようなタイプをちゃんと認めてくれる、コッコとするポジション、長く出続けて認められる。頑張って頑張ってようやく、右内田で行こうってなる	試合に出るには監督の考えやチームの方針に忠実にプレーすることができることも必要。目立たないリスクもあるがドイツでは評価される。サイドバックは試合に出場し続けることで評価されるポジション	ドイツでは監督の考えチームの方針に忠実にプレーをできる選手も評価される、サイドバックというポジションは特に地道に結果を出し続けることが重要	自分のやりたいプレーよりも監督やチーム方針に沿ったプレーをすることでスタメンに定着できた
内田篤人	あんまりなかったね。自分が活躍していればちゃんと出られたし、一度定着してしまえばそう簡単に変えられることはなかった。定着するまでが大変だけれどね。評価を得られれば、監督が変わっても結果をだし続けられ。（どの監督も）私のことは馬鹿にしないけど、そっとしておいてくれる。真面目にやっていることを評価してくれる立ち位置になることが一番やりやすかった。	自分が活躍していればちゃんと出られた。一度定着してしまえばそう簡単に変えられることはなかった。定着するまでが大変。評価を得られれば監督が変わっても結果を出し続けられ、真面目にやっていることを評価してくれる立ち位置になることが一番やりやすかった。	結果を残し続けられれば試合に出られた。一度レギュラーに定着すれば変えられる機会は減る。定着するまでが大変。評価を得られれば監督が変わっても試合に出続けることができた。真面目にサッカーに取り組む姿勢は監督やチームメイトからの信頼に繋がる	一度監督から信頼を得てレギュラーに定着すると変えられることはあまりない。試合だけでなく普段からサッカーに対して取り組み姿勢もチームからの信頼に繋がる	試合だけでなく普段のサッカーに対する姿勢からもチームの信頼を得ることができる

発話者	テキスト	〈1〉テキスト中の 注目すべき語句	〈2〉テキスト中の 語句の言い換え	〈3〉左を説明するような テキスト外概念	〈4〉テーマ・構成概念
内田篤人	選手とはほとんど絡むことはなかった。誘われても行かなかった。ある程度出身地域の選手同士でかたまったりしていたが、アジア人は一人しかいなかったから、一人でいた。正直皆で食事へ行っても話すこともなかったし、でも試合に出ていたから、それが自分の居場所になっていたかも。プレーの面でも（他の選手から）何も言われなかった。相手が気持ちよくプレーができるように私は動いていた。	選手とはほとんど絡むことはなかった。誘われても行かなかった。試合に出ていたからそれが自分の居場所になっていた。プレーの面でも（他の選手から）何も言われなかった。相手が気持ちよくプレーができるように私は動いていた。	チームメイトとのサッカー以外での交流はほとんどなかった。試合に出場することがチームでの居場所になっていた。チームメイトと交流はなかったがプレーで何も言われることはなかった。チームメイトが気持ちよくプレーできるように意識してプレーをしていた。	チームメイトとのコミュニケーションは活発には行わない、試合を通じてチームメイトから信頼を得た。	チームメイトとサッカー以外での交流は無かったが、試合を通じてチームメイトからの信頼を得た。
内田篤人	（海外に行っても）多分何もできないよって思う。自分より能力の高い選手なんていっぱいいるし、名前も知られていないし、根性だけだね。長谷部さんも同じように根性が大切だって（若い選手には）言っていた。（若い選手が）海外へ行きたいというが、日本で結果を出していないのに、よく言えるな。って思う。甘い。すごく孤独で寂しいんだよ。行って頑張ればって思っていたけど。	（海外に行っても）多分何もできない。自分より能力の高い選手なんていっぱいいる。名前も知られていない。根性だけ。根性が大切。すごく孤独で寂しい。行って頑張ればって思っていた。	自分より能力が高い選手が多い。知名度も低い。根性しか通用しない。海外挑戦は孤独。想像していたより厳しい現実。	自分より知名度も能力も高い選手が多い。ブンデスリーガで生き残る術は強い精神力。	自分よりも能力も知名度も高い選手が多く挫折感や孤独感に負けない強い精神力が重要。

ストーリーライン
内田選手は自分のプレーに固執することなく監督の方針や考えの理解に努め、監督が望むプレースタイルを選択することで評価を受け試合に出場することができていた。監督が変わるごとに戦術や方針が変わるが、それぞれの監督の方針に合わせてプレースタイルを選択しチームのために自分を犠牲にするような姿勢は、どの監督からも評価を得ることができレギュラーとして定着することができていた。また、試合に出場することにおいてはチームメイトとの関係性は、サッカー以上の関係性は築いておらず試合を通じて信頼を得ていた。
理論的記述
<ul style="list-style-type: none"> ・長谷部選手から監督の情報を事前に入手したことでチーム加入時の想定ができた ・自分の得意なプレースタイルよりもチームや監督が求めるプレースタイルを選択する ・監督が変わるごとに監督の考えの理解に努めた ・チームのために自分を犠牲にするような姿勢が評価された ・チームメイトとの関係性は監督ほど意識はしていない ・知名度も実力も上回る選手が多数いるブンデスリーガで試合に出続けるためには挫折感や孤独感に負けない強い精神力が重要
さらに追求すべき点・課題
<ul style="list-style-type: none"> ・海外のトップレベルの選手も監督の方針に対して忠実なのか ・監督の方針に左右されないチームとしての変わらない戦い方はないのか

きなデータから体系化を試みる趣旨と合致したためである。

倫理的配慮としては、インタビュー対象者に調査の概要を説明し、インタビュー結果は研究目的以外で使用しないこと、実名の公表も含めて同意を得た。

3. 結 果

3.1 ブンデスリーガに定着した選手の共通点

5名のインタビュー結果から27の理論的記述が導き出され、共通点として3つのカテゴリー、9つのサブカテゴリーが抽出された。〔表4〕

カテゴリー「選手が工夫した行動」のサブカテゴリーとして「自分のプレーよりも監督やチームが求めるプレーを優先」（香川選手、内

表4 インタビュー対象者の理論的記述に含まれていた項目

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	発話者	理論的記述
選手が工夫した行動	自分のプレーよりも監督やチームが求めるプレーを優先	監督の要求	香川真司	監督の考えを体現することを意識して信頼を掴んだ
			内田篤人	自分の得意なプレースタイルよりもチームや監督が求めるプレースタイルを選択した
			細貝 萌	監督の要求に応じて臨機応変にプレースタイルやポジションを変えた
			大迫勇也	監督が求めるプレーを行うことで信頼を得た
			原口元氣	監督の要求に応えられるように自分のプレースタイルや個人戦術を全て見直した
	チームメイトよりも監督とのコミュニケーションを重視	チームメイト	内田篤人	チームメイトとの関係性は監督ほど意識はしていない
			細貝 萌	試合で結果を残すことがチームメイトからの信頼に繋がった
			原口元氣	チームメイトに対する意識はあまりなく一定の距離を保った
	試合だけでなく練習から積極的に存在をアピール	練習	大迫勇也	試合だけでなく日々の練習から監督にアピールをした
			原口元氣	監督に対して自分の考えを伝えるだけでなく練習態度の姿勢も含めたアピールをした
	チームにおける自分の実力を客観的に把握	自分の実力の把握	細貝 萌	チーム内における自分の実力を客観的に把握し行動した
			原口元氣	チームにおける自分の実力を客観的に把握しレギュラーの当落線上であることを認識した
ブンデスリーガの傾向	ブンデスリーガでは組織的にプレーできる選手が評価される	組織的プレー	香川真司	ブンデスリーガは組織的なプレーを求められるので日本人選手が比較的评价されやすいリーグである
			内田篤人	チームの為に自分を犠牲にするような姿勢がブンデスリーガでは評価される
		日本人選手の強み	原口元氣	海外の選手は監督の意向にに合わせて考えやプレースタイルを変えられる選手は少ないので、日本人選手の強みである
	日本人選手に対する事前の評価が低い	日本人選手の弱み	香川真司	日本人というだけで過小評価されているので監督から評価を得ることが大事
			大迫勇也	サッカーで日本人選手の評価が低いのでイメージを払拭するようにアピールすることが重要
海外リーグでプレーする上で重要なこと	プレーに集中するためのピッチ外の環境づくり	代理人との関係性	香川真司	代理人やチームメイト等との良好な環境を作ることが精神的な負荷の軽減に繋がった
			大迫勇也	信頼できる代理人が移籍先のチームと交渉を行ったことで移籍後すぐにチームに順応できた
		日本人選手の存在	内田篤人	長谷部選手から監督の情報を事前に入手したことでチーム加入時の想定ができた
			原口元氣	既にブンデスリーガでプレーしていたチームメイトの細貝選手を頼ることで環境に順応した
	孤独感や結果が出ない苦境を耐え抜くような強い精神力	言葉や気候	細貝 萌	気候や言葉の問題から環境に順応できないことがパフォーマンスに影響した
			香川真司	結果が出なくて厳しい時期や孤独感を耐え抜く強い精神力が重要
		孤独感、挫折感	内田篤人	知名度も実力も上回る選手が多数いるブンデスリーガで試合に出続けるためには挫折感や孤独感に負けない強い精神力が重要
		プライドを捨てる	原口元氣	自分より才能ある選手が多くいる中で生き残るために自分のプライドを捨て取り込む精神力が重要

田選手、細貝選手、大迫選手、原口選手)、「チームメイトよりも監督とのコミュニケーションを重視」(内田選手、細貝選手、原口選手)、「試合だけでなく練習から積極的に存在をアピール」(大迫選手、原口選手)「チームにおける自分の実力を客観的に把握」(細貝選手、原口選手)「自身のプレーを評価してくれる監督がいるチームに移籍」(細貝選手、大迫選手)の5項目が挙げられた。特にカテゴリー「自分のプ

レーよりも監督やチームが求めるプレーを優先」は全ての選手に共通し、対応する理論的記述として内田選手の「自分の得意なプレースタイルよりもチームや監督が求めるプレースタイルを選択した」、細貝選手の「監督の要求に応じて臨機応変にプレースタイルやポジションを変えた」、原口選手の「監督の要求に応えられるように自分のプレースタイルや個人戦術を全て見直した」等が挙げられた。

次にカテゴリー「ブンデスリーグの傾向」のサブカテゴリーとして「ブンデスリーグでは組織的にプレーできる選手が評価される」(香川選手, 内田選手, 原口選手)「日本人選手に対する事前の評価が低い」(香川選手, 大迫選手)の2項目が挙げられた。特に原口選手の「海外の選手は監督の意向に合わせて考えやプレースタイルを変えられる選手は少ない」という理論的記述からコード「日本人選手の強み」が抽出された一方で, 香川選手の「日本人というだけで過小評価されているので監督から評価を得ることが大事」という理論的記述からコード「日本人選手の弱み」が抽出された。

さらにカテゴリー「海外リーグでプレーする上で重要なこと」のサブカテゴリーとして「プレーに集中するためのピッチ外の環境づくり」(香川選手, 内田選手, 細貝選手, 大迫選手, 原口選手), 「孤独感や結果が出ない苦境を耐え抜くような強い精神力」(香川選手, 内田選手, 原口選手)の2項目が挙げられた。対応する理論的記述として, 香川選手の「代理人やチームメイト等との良好な環境を作ることが精神的な負荷の軽減に繋がった」, 内田選手の「長谷部選手から監督の情報を事前に入手したことでチーム加入時の想定ができた」, 細貝選手の「気候や言葉の問題から環境に順応できないことがパフォーマンスに影響した」等が挙げられた。

4. 考 察

4.1 監督から信頼を得ることの重要性

カテゴリー「工夫した行動」の内容のほとんどが監督から信頼を得るための行動を取っており, いかに監督から信頼を得るかが試合に出場をする上で重要なことであるかが伺えた。このような行動があった背景には, ブンデスリーグでは日本人選手が過小評価される傾向にあり, チーム加入時や新監督就任時の期待値が低いことが考えられた。従って日本人選手がブンデスリーグに定着するためには, チームの主力選手と遜色ないサッカーの技術があったとしても監督からの評価を上げる努力をする必要があると

示唆された。

また, 監督が変わっても出場し続けることができた内田選手や, ルフカイ監督とともに複数のチームで出場し続けた細貝選手の行動を分析すると, 日本人選手が監督から信頼を得るための行動として, 最も大切と考えられるのは, 監督の求めるプレースタイルやポジション変更をすることも厭わない姿勢や, 練習から真剣に取り組むことである。何故ならブンデスリーグは組織的なプレーが重視される傾向にあるため, 監督が求める戦術やプレースタイルに応じることができなければ信頼を得られないからである。筆者の経験から, 監督の方針や意向はJリーグにおいても重要ではあるが, ブンデスリーグのように自分の特徴を抑えてプレースタイルを変えること等をチームや監督から要求をされることはなかった。筆者はブンデスリーグのFCケルンにおいて出場機会を得られ, 2部から1部に昇格することに貢献できた時期もあったが, 監督の方針を実現することに徹底できなかったことや, 試合に出場できない時期が長くなり精神的なコンディションを落としてしまったことがあった。ブンデスリーグに定着できた5名の選手が, 監督の評価の重要性や強い精神力が求められるリーグの傾向を捉え, 監督やチームの考え, プレースタイルの変更やポジションの変更も受け入れた上で, ベストパフォーマンスを発揮できた選手であったことを踏まえると, 筆者が定着するに至らなかった原因がそこにあったと考えている。

4.2 欧州5大リーグで活躍するために必要なこと

ブンデスリーグをはじめ欧州5大リーグでプレーするためには, まずは国際移籍先のチームの選び方である。ブンデスリーグに定着できた5名の選手は, いずれもJリーグで活躍した後にはブンデスリーグに移籍していた。しかしながら, 2019年の夏の移籍ではJリーグからブンデスリーグに移籍した選手は1人もいない状況であった。栗山(2013)⁵⁾が, 日本人選手がブレ

ミアリーグでプレーするための最初の移籍先として最適なりーグの調査を行い「プレミアリーグに移籍する際のルートとしては、日本から直接よりも、欧州の他のリーグを経由する方が効率的といえる」と指摘している。2020年前後にブンデスリーガで活躍している選手の移籍状況を見ると、遠藤航選手が浦和レッズから2018年シーズンにベルギー1部リーグのシント＝トロイデンVV（以下、シント＝トロイデン）に移籍し、2019年シーズンからVfBシュトゥットガルトに在籍していた。また、イタリア・セリエAのボローニャFCに在籍している富安健洋選手も同様にアビスパ福岡から2018年シーズンにシント＝トロイデンに移籍し、2019年シーズンにボローニャFCに移籍をしている。このような状況をふまえると、欧州5大リーグでプレーするための現実的な手段として、オランダやベルギーやポルトガルなどの欧州5大リーグ以外の国で一定の成果を挙げ、プレミアリーグだけでなくブンデスリーガをはじめとする欧州5大リーグに挑戦をするというステップアップの考えを持つことの重要性が高まることが想定される。つまり、ブンデスリーガでプレーするためには、まず欧州5大リーグ以外の欧州のリーグに移籍し評価を上げることが重要である。

次に移籍後重要になるのは、ピッチ外環境作りである。環境に順応ができないと細貝選手のように言語の問題や気候に順応できず本来のパフォーマンスを落とすことに繋がってしまう。その点で、信頼できる「代理人との関係性」や共にブンデスリーガでプレーをする「日本人選手の存在」が選手の助けになっていた。チームメイトとは比較的ドライな関係であり、サッカー以外であまりコミュニケーションは取っておらず一定の距離を置いていることによる「孤独感」、試合に出場できなかったり結果が出せなかったりした時の焦りや「挫折感」といった精神的にも厳しい環境の中で活動していることが分かる。選手の活動の環境作りとして、独立行政法人日本スポーツ振興センター発行の「トップアスリートの強化・研究活動拠点

の在り方に関する調査研究報告書」において冬季競技等の拠点の在り方について検討がされており、国内ではなく、海外に独自の強化拠点を設置することや、独自に拠点を設置する以外にも、他国の大学や競技団体のネットワークの構築の方向性が示唆されている⁶⁾。サッカーにおいても従来は、海外クラブへの移籍後の活動については選手個人の活動の範囲と考えられていたが、そうではなく欧州で活動する選手を支援する仕組みを作り、サッカーに専念しやすい環境を提供することも、より多くの日本人選手が海外挑戦を成功させるためには必要であると考えられる。

最後にブンデスリーガに定着するためには、サッカーの技術以外に、戦術に対する理解力、攻撃も守備もできる器用さ、監督に対してアピールをし続ける貪欲さ、孤独感や逆境に耐えられる強い精神力が必要と考えられる。今回インタビューした5名はこれらのいずれの能力も兼ね備えていたことがブンデスリーガに定着できた要因のひとつである。従って、日本国内において、国際移籍を志す育成年代の選手に対してサッカーの技術向上以外にもこれらの素養を身につけられるような環境を提供することも求められる。

4.3 本研究の限界と今後の課題

上述した通り欧州5大リーグへの移籍ルートが変化しつつある状況を今後捉えた研究が必要であることや、久保建英選手のように若年期から海外でプレーをするという新たな傾向もある。これらの新しい移籍ルートにより海外リーグで活躍している選手については更なる研究が必要である。

5. 結 論

本研究は、日本人選手がブンデスリーガで定着することができた要因を明らかにすることを目的に、ブンデスリーガに5シーズン以上在籍した5名の選手に対してインタビュー調査を行い、SCAT分析を用いた内容分析を行った。

その結果,ブンデスリーガに定着した選手は,チーム加入後,試合に出場するために監督から信頼を得ることを重視し,ポジションやプレースタイルを柔軟に変更することで監督の要求に応え信頼を得ていたことが分かった.

以上の結果から,海外リーグでプレーをし続けるためには,戦術や監督の考えに対する理解力,攻撃も守備もできる器用さ,監督に対してアピールをし続ける強かさ,プレッシャーや逆境を乗り越える強い精神力といったサッカーの技術以外の面も重要であることが示唆された.

参 考 文 献

- 1) transfermarkt.com, <https://www.transfermarkt.com/>, 2020年1月9日閲覧.
- 2) 高橋義雄:「日本人Jリーグ選手の国際移籍の要因に関する研究」, スポーツ産業学研究 Vol.14, No.1, pp.13-22, 2004.
- 3) 上向貫志, 川田尚弘, 飯田義明:「日本人プロサッカー選手の国際移籍に関する研究」, 武蔵大学人文学会雑誌, 第47巻 第3・4号, pp.47-62, 2015.
- 4) 大谷尚:「4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案ー着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き」, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 教育科学 54(2), pp.27-44, 2007.
- 5) 栗山貴行:「Jリーグ選手を最終的にイングランド・プレミアリーグにステップアップさせるための最初の海外移籍に関する研究」, 早稲田大学修士学位論文, 2013.
- 6) 独立行政法人日本スポーツ振興センター:「トップアスリートの強化・研究活動拠点の在り方に関する調査研究報告書」, 平成28年5月.